

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「音で“開けドア” 無人コンビニ実験」
- 2) 「KADOKAWA “ダ・ヴィンチストア Next Stage ‘未来の書店’ ” を体験」
- 3) 「仮想現実で消火器操作、ASATECのVRシステムが面白い」

1) 「音で“開けドア” 無人コンビニ実験」

ミニストップは4日、無人コンビニのドア解錠にヤマハの音響通信技術を使う実験を始めた。スマートフォンで専用サイトに接続し、特別な音楽を再生するとドアが開く。防犯上難しかった病院などへの無人コンビニ出店につなげたい考えだ。

ヤマハが開発した音響通信技術「SoundUD」を使い、都内にある同社の事務所で実験する。通常の音楽と同時に人の耳にはほとんど聞こえない周波数の音を流し、これが鍵となって解錠される仕組みだ。インターネット通信やブルートゥース（近距離無線通信）と異なり、音の届く範囲でしかセンサーが反応しないため利用者以外が遠隔で解錠する危険がない。専用ゲートを設置するのに比べて初期投資も10分の1以下で済むという。

ミニストップはオフィス内を中心にキャッシュレス決済専用の無人コンビニを700カ所以上で運営している。飲料やお菓子など100アイテム程度を陳列した棚をオフィスの一角に設置しているが、間仕切りがないため病院や工場など不特定多数が利用する場所には、防犯上出店できなかった。

(2022/07/06 日経MJ)

無人店舗は増加傾向にあるが、やはり懸念されるのは防犯面だろう。特に病院などは通行人も少なく開け広げにしておくのは少し不安が残る。施錠するにもカギの管理が困難なのでスマホを使った認証は必然的に行われていくだろう。「音」という少しアナログな方法ではあるが費用面や安全面でも導入しやすいので今後の展開に注目したい。

2) 「KADOKAWA “ダ・ヴィンチストア Next Stage ‘未来の書店’ ” を体験」

新型コロナウイルスの感染拡大による巣ごもり需要を受けて市場規模が急拡大した「電子書籍」。インプレス総合研究所の調査によると、電子書籍の市場は2019年度から2020年度にかけての1年間で28.6%も増加し、2025年度には6700億円を超える市場に成長するとも予測されている。

また電子書籍ブームとは対照的に、この20年間、書店の数は減少を続けており、2000年の2万1,495店と比べて、2020年5月時点での日本の書店数は1万1,024店と1万店ほど減っていることが分かる。

そんな時代にAIやメタバースの活用で「リアル書店」の利用を促進する取り組みがある。今回、KADOKAWAの行う「ダ・ヴィンチストア Next Stage “未来の書店”」を体験し、プロジェクトチームの一員である楫野晋司氏に話を聞いた。

筆者が体験してきた「ダ・ヴィンチストア Next Stage “未来の書店”」は7月2日～15日までの期間限定で、角川武蔵野ミュージアム（埼玉県・所沢市）で開催されている展示だ。4月29日・30日に幕張メッセで開催された「ニコニコ超会議2022」で反響が大きかった「未来の書店」の体験デモが展開されており、「メタバース書店」「VR本棚劇

場」「『AIナツノ』による本のリコメンド」「全冊検索システム」という4つのコンテンツを入場料無料で楽しむことができる。
以下、この4つのコンテンツの詳細と楽しみ方を紹介しよう。

「メタバース書店」は、角川武蔵野ミュージアムを敷地内に置く、ところざわサクラタウン内にある書店「ダ・ヴィンチストア」をイメージした空間をメタバースに再現したものだ。VRゴーグルまたはスマートフォンでメタバース書店の中を歩き回りながら、約5,000点の在庫から本を探ることができるほか、メタバース書店にアクセスしている他の顧客と仮想空間上での会話を楽しむことができる。
VRゴーグルにはマイク機能が装備されており、実際に通話のような要領で自分のおすすめの本を周りに紹介したり、おすすめの本を紹介してもらったりと、体験デモや自宅などからアプリで参加している顧客同士で情報交換をすることができるという。

「VR本棚劇場」は、角川武蔵野ミュージアム内の「本棚劇場」を仮想空間に再現したものだ。「メタバース書店」と同じくVRゴーグルで体験が可能になっている。画面いっぱい多くの本が並び、表紙の絵柄やタイトルなどから好みの本を選択し、そのまま試し読みや購入まで完結することができるシステムになっているという。

「『AIナツノ』による本のリコメンド」は、今イチオシのKADOKAWAの書籍の内容をAIが解析し、対話と表情分析によって、AIが今の自分に最適な本を提案してくれるサービス。AIナツノが質問する内容に対して、当てはまる項目を1つ選んで、心理テストのような要領で進んでいくと、その時の気持ちや好きなジャンルを察知しておすすめの本を選んでくれるというサービスだ。実際におすすめ本の結果画面のQRコードから選ばれた本を店頭や電子書籍で購入することもできるという。

「全冊検索システム」は、展示会場にあるタブレットにて書名、著者名、ジャンルなどの条件を検索し、KADOKAWA発行のほぼすべての書籍から欲しい本を簡単に探すことができるというサービス。これまでカウンターで行われていた在庫の問い合わせから注文に至る手続きが、すべてデジタル化されて、よりスムーズで便利になるという効果があるという。

楫野氏曰く、オンラインショップを訪れて本を購入する顧客は「目的がある」「目当ての本がある」といった人がほとんどだという。しかし、リアル書店を訪れる人は、特に目的の本がない人やその時々のお出逢いを楽しむために訪れる人も多いのだという。そのため、KADOKAWAでは、「デジタルでリアル書店を拡張する」というどちらもの良さを兼ね備えた「ダ・ヴィンチストア Next Stage “未来の書店”」に展示されている4つのコンテンツを考案したとのことだ。
KADOKAWAが書店のデジタル化に着手したのは2014年からであり、IT関連企業であるドワンゴとの経営統合がきっかけだったという。それ以降、デジタル化の模索が続き、2018年には書店への来店や本の購入に応じてポイントが貯まるKADOKAWAアプリを開発・リリースしたり、2021年には今回展示されているVR本棚劇場が開発されたりと、次から次へとデジタル化の商材を開発している。

このようにデジタル化の商材を多く手掛けるKADOKAWAだが、一般に向けてデジタル系商材の展示を行うまでには多くの苦労もあったという。実際にこのプロジェクトには100名を超えるスタッフが関わっているといい、デジタルマーケティング室が主体となりながら、展示関係の部署やKADOKAWA直営の電子書籍サイトであるBOOK☆WALKERからもメンバーをアサインするなど、多くの人に関わって今回の4つのコンテンツを展示する「ダ・ヴィンチストア Next Stage “未来の書店”」が完成できたのだという。そのような苦労もあって展示に至った「ダ・ヴィンチストア Next Stage “未来の書店”」だが、同社が想定していたよりも多くの来場者が訪れているようで、楫野氏は「ファミリー層やカップルを中心に多くの方に来場いただいています。待機列ができ

ている時間も多く、たくさんの方に楽しんでいただけていると思います」と、顔をほころばせながら語っていた。
(2022/07/13 TECH+)

近年目に見えて本屋は減少しており、各社試行錯誤しながら書店の在り方を模索しているように思う。中身がわからないしむしろわかってしまうと買って読む意義がなくなってしまふ、書籍特有の売り方の難しさがあると思うが、本屋でじっくり好みを探するという体験は他にはない楽しみがある。家の近くに大型店舗がなかったり読みたいものがわからないというときにVR空間で手軽に探索できるし、カフェやイートインスペースにQRを掲示するだけでもアクセスの機会は増えるだろう。未来の書店の形にぜひ触れてみたい。

3) 「仮想現実で消火器操作、ASATECのVRシステムが面白い」

ASATEC（東京都港区、朝日恵太社長）は、仮想現実（VR）で消火器の使い方や注意点を学ぶことができる「VR消火訓練PRO」を開発した。同社が開発したVR消火体験用コントローラーを活用し、実際に消火器のレバーを握るとVR内で消火薬剤が噴射する。

実際の油火災の現場をVR内で再現し、火炎や消火薬剤の噴射表現と消火器を使う時の注意事項を消火器メーカーの技術職員監修のもと開発した。消火薬剤の噴射音や火炎の音も消火実験施設で録音したものを使用しており、実際の消火訓練に近い消火体験ができる。
(2022/07/15 日刊工業新聞)

これまでは消防訓練をしても「消火器を握るまで」だったものが実際に噴射するところまで体験できるならばやってみたい。実際の火災現場に遭遇したらパニックになると思うが、よりリアルな訓練で手順を一度でも確認していればきっと役立つだろう。VRが進化して様々な場面で取り入れられてきているものの、多くの人はまだ馴染みが薄い状況だ。このような非常時の訓練に活用したり、職業訓練などでも活用したりして、多くの人があるゆる場面に対応できるような環境になれば良いと思う。